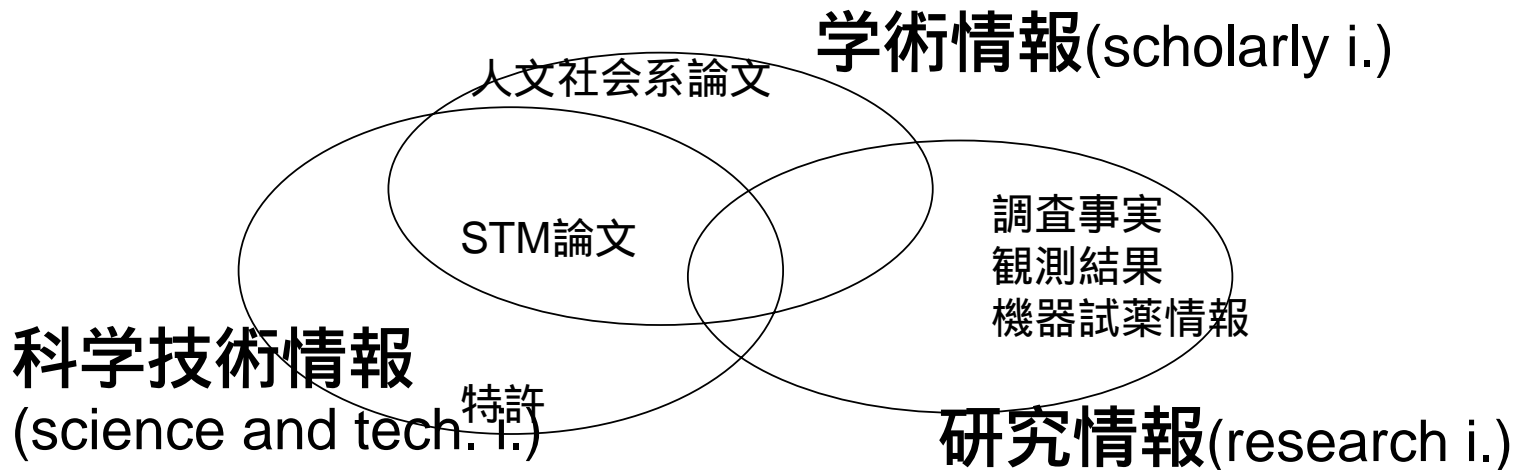


# 学術情報流通の現状と課題

土屋俊  
(千葉大学)

# 学術情報(scholarly information)とは

学術研究活動によって産み出され、**出版と教育**を通じて地域と世代を越えて伝達され**人類の知的遺産**として保存される情報(したがってそれは、学術研究の成果として生み出される情報と、さらに学術研究のために必要とされる情報との総体)



# たとえば、形態に則して例を分類すると

- 学術論文(原著論文、総説(レビュー論文)、実験方法論文、原典批判・翻刻・校定)、専門書
  - PEER REVIEWによる品質保証が特徴
- コンフェレンス・ペーパー、テクニカル・ペーパー、史料、ディスカッション・ペーパー、口頭ディスカッション等
- 教科書、概説、ハンドブック、授業・演習
- 事実データベース
- 2次情報データベース
- パーソナル・コミュニケーション(伝統的には往復書簡)、メモ・ノート・日誌、ウェブログ、チャット/掲示板

# 学術情報流通のStakeholders

- 著者としての研究者
- 学会
- 出版者(営利企業、学会を含む非営利団体等)
- 予約代理店(subscription agents)
- 大学図書館(research library, undergrad library等)
- 文献提供業者(document suppliers)
- 読者・利用者としての研究者
- 研究資金提供団体(公的、私的)
- 国立図書館
- 公共図書館(New York Public Library 等)

# 20世紀後半における2大事件

- **学術雑誌の商業化**
  - 商業的流通の可能性の発見(1950年代)
  - 専門的出版社の登場と拡大(1960年代)
  - 寡占の進行(1980年代)
  - 価格の高騰(1980年代から1990年代)
- **学術情報流通の電子化**
  - 前史(1980年代)
  - インターネット・インフラの整備(1990年代)
  - ネットワーク提供・サイトライセンスの一般化(21世紀にかけて)

# 学術雑誌商業化の影響

- 「学術雑誌」の成立(19世紀)と危機(20世紀後半)
  - 相互交換によるコミュニケーション(「紀要」)からコミュニケーションの専門化 学術出版社の繁栄
  - 産業としての学術コミュニケーション(10兆円の市場)
  - Serials Crisisの出現(1980年代以降北米中心に)
    - 科学研究活動の絶対量の増加
    - アカウンタビリティとしての論文産出(政府提供資金の増大)
    - 商業出版における資本の論理 寡占化 弾力性低下

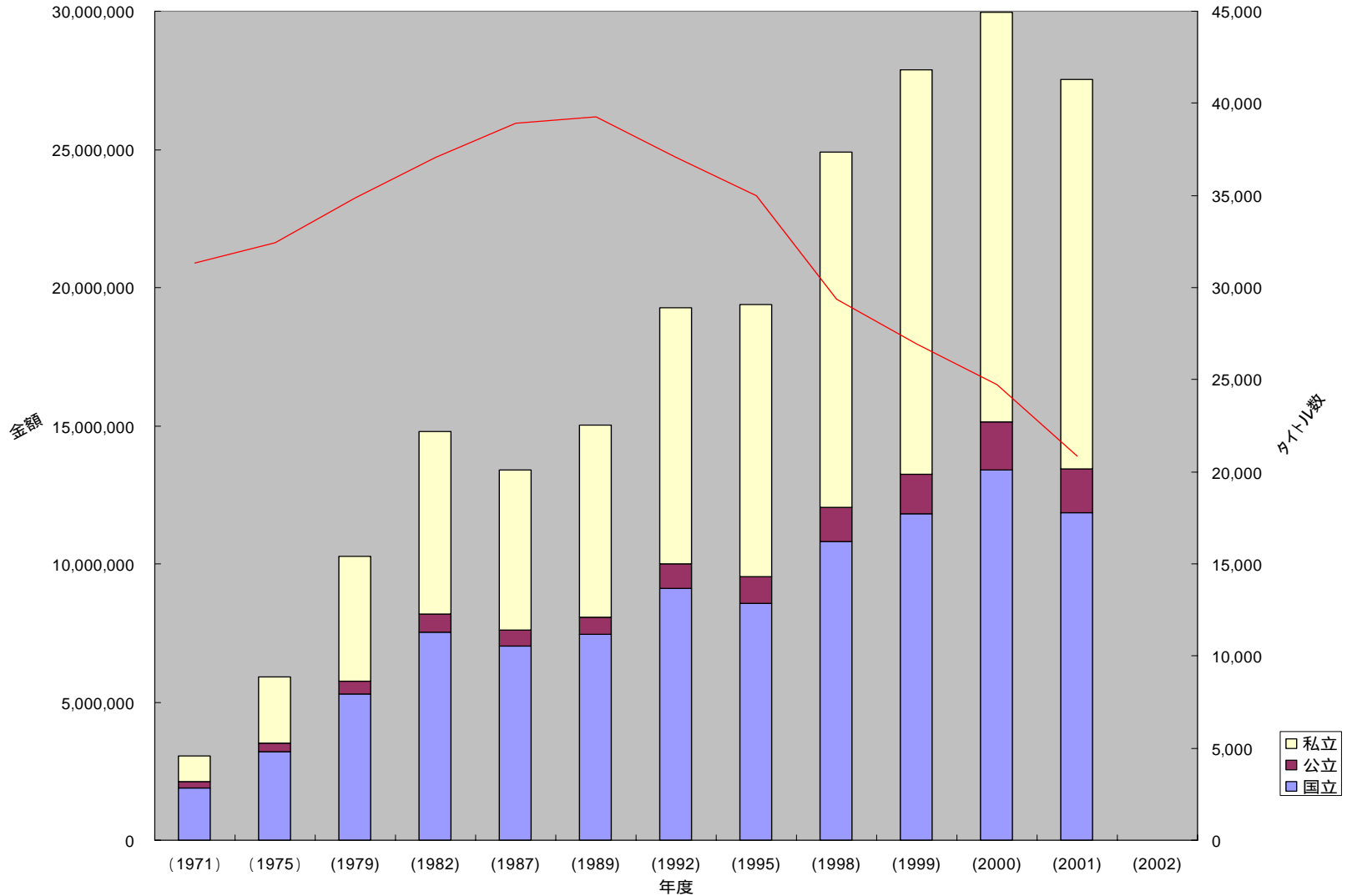
# 加えて、日本で起きたこと

- 1990年代における購入タイトル減
  - 大学図書館全体で導入する雑誌のタイトル数が4万から2万に半減
  - 支出は増えた
- さまざまな図書館電子化の試み
  - CD-ROM、CD-ROMネットワーク利用
  - 学術情報センター (NACSIS)
  - ペーパーレス図書館
  - 貴重書のデジタルイゼーション等

単位:千円

### 日本国内図書館の外国雑誌購入費および受入れタイトル数

但し1982年度までは和雑誌も含む



タイトル数は、国立情報学研究所が管理する「雑誌総合目録」による。購入額は、文部省、文部科学省「大学図書館実態調査」による。

# 電子ジャーナル時代の到来

- 表現手段の多様化
  - 動画、音声、VR:対話的利用
- 即時性
  - すぐに、多数に
- 検索性の向上(全文検索、横断検索、2次情報との連携、2次情報の自動作成)
- リンク(論文単位での追跡可能)
- 「利用」の把握が可能となる      利用統計の登場
- 安価
  - 頒布費用が極度に低減
  - 結果として、「出版」コストが低くなる？高くなる？  
インターネットの資本主義原理に従う(Winner take all)

# 国立大学図書館協議会電子ジャーナルタスクフォース

- 2002年からの契約を念頭において2000年9月設立
- 出版社との直接交渉を原則(当初は、主要5社ターゲット)
- 契約条件の改善(1大学1サイト原則、ILL、学外者利用、プライス・キャップ等)
- 利用環境の改善(ミラー・アーカイブ設置、利用者講習担当者研修、統計情報の正確化(COUNTER対応)等)
- 予約購読意思決定システムの改善、「集金」システムの確立の推進(「全学予算化」等)
- ただし、契約は大学ごと(条件は国立大学全体を一つのコンソーシアムとみなさせる)
- 相当程度の成果:「2002年は(日本の国立大学の)電子ジャーナル元年」
- 現在20数社と交渉

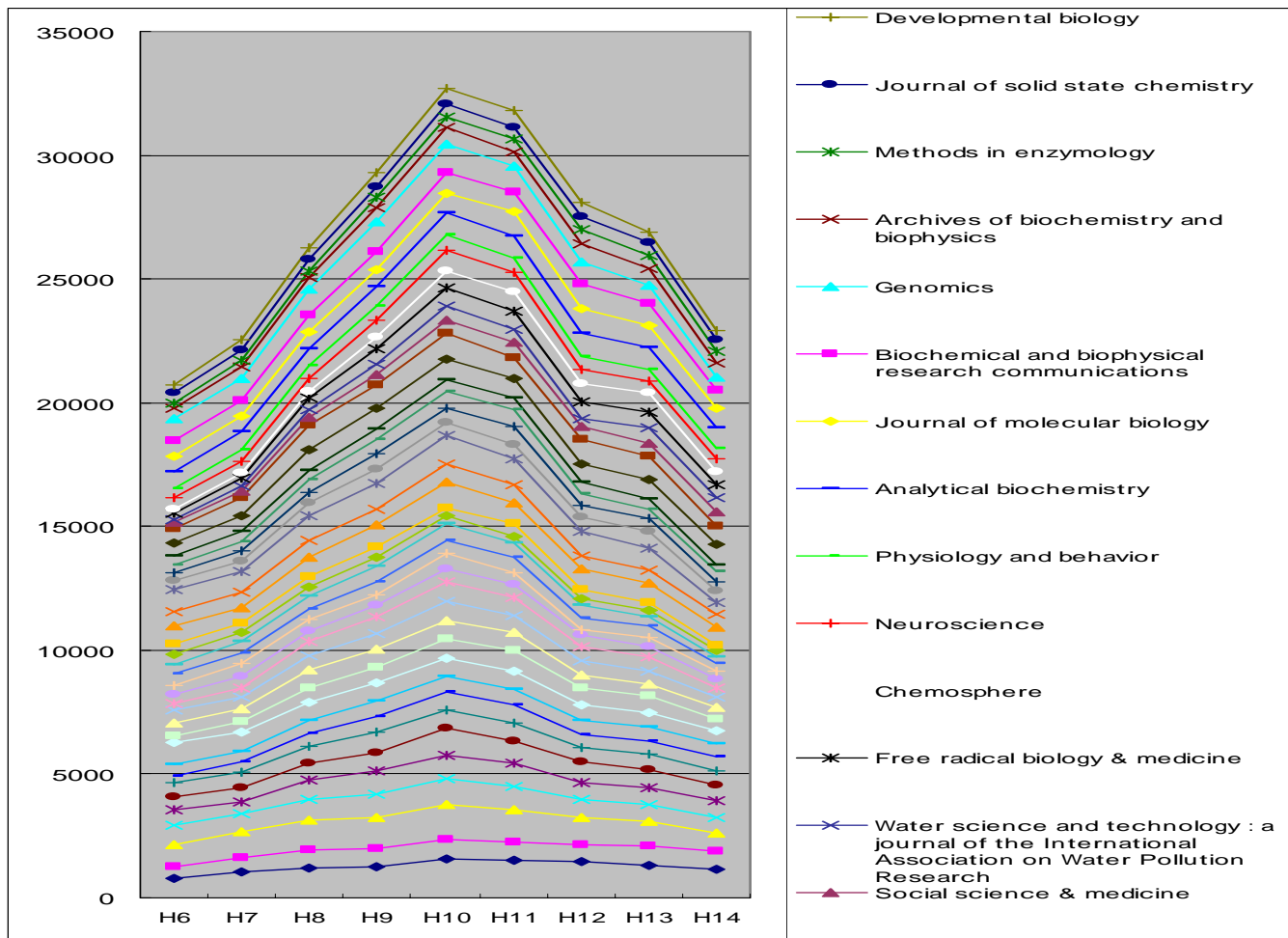
# 図書館サイドからみた変化

- 物品購入から使用許諾へ
  - すべては契約！
- タイトル予約購読からデータベース(パッケージ)へ
  - Big Deal の(一定程度の)妥当性
  - 二次データベースとの連携
- 利用者サービスのバーチャル化
  - ポータルによる誘導、利用環境整備
  - 「保存」「管理」の概念の変化
  - ILLへの影響
- 厳密な利用統計の可能性(COUNTERプロジェクト)
  - 将来のプライシング・モデル
  - 対学内(Value for moneyによる議論)
- 「コンソーシアム」の重要性の増大
  - 購読規模 = 収入規模をめぐる戦い

# Elsevier社タイトルに対する図書館間複写依頼件数の変化

(NACSIS-ILL統計から、埼玉大学附属図書館酒井氏調査による)

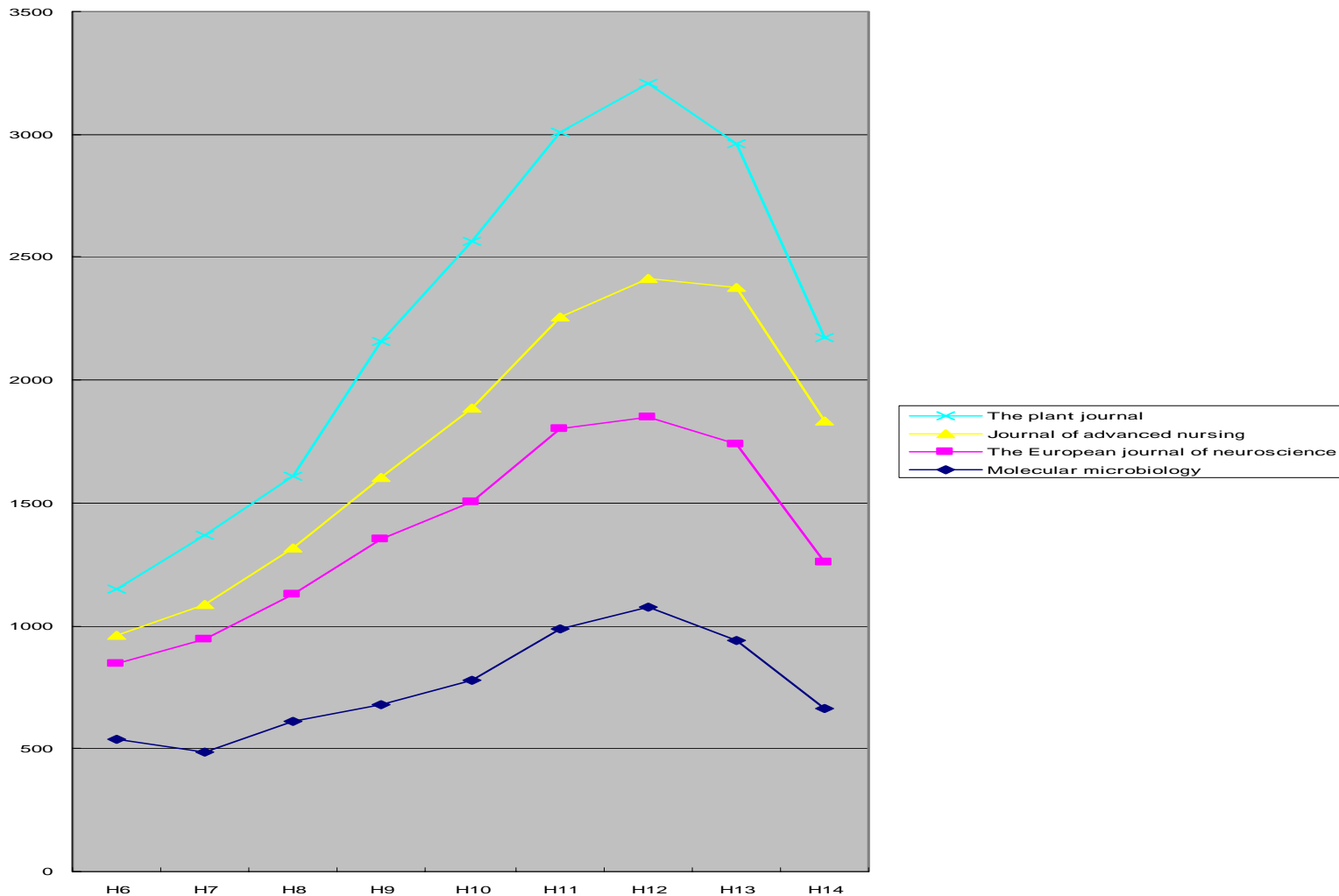
- ・ コンソーシアム形成によってILL件数が急減(1999年はSD21プログラムの全タイトル開放、2002年は国立大学コンソーシアムの形成)



# Blackwell社タイトルに対する図書館間複写依頼件数の変化

(NACSIS-ILL統計から、埼玉大学附属図書館酒井氏調査による)

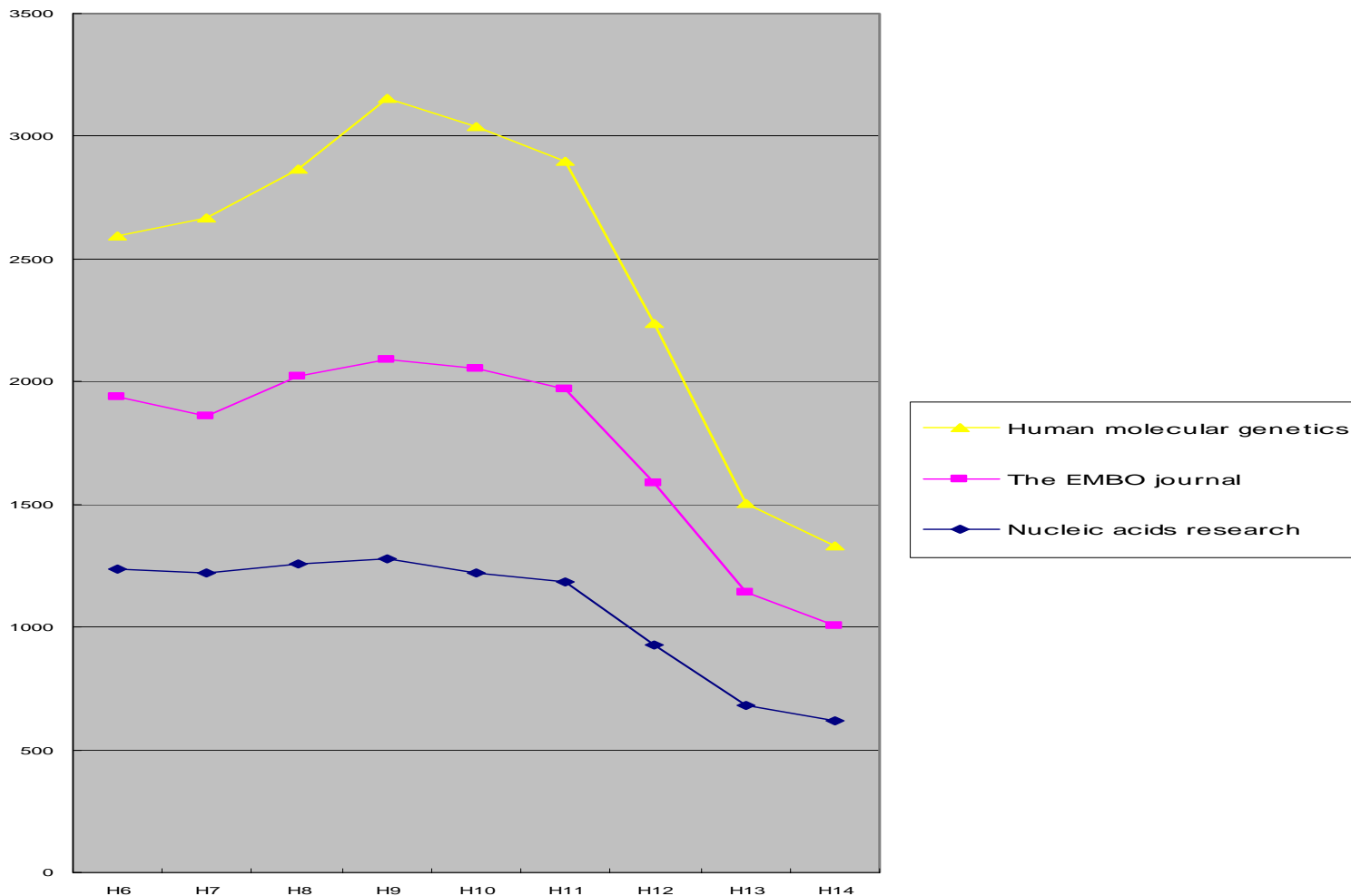
・コンソーシアム形成によってILL件数が急減(2002年の国立大学コンソーシアムの形成の直接的影響)



# OUP社タイトルに対する図書館間複写依頼件数の変化

(NACSIS-ILL統計から、埼玉大学附属図書館酒井氏調査による)

・NIIによる国立、私立、公立を問わないナショナルサイトライセンス実験  
(2001年から2003年)によって急速に減少したケース



# ACSタイトルに対する図書館間複写依頼件数の変化

(NACSIS-ILL統計から、埼玉大学附属図書館酒井氏調査による)

・コンソーシアム形成が遅れたので、2000年以降も増え続けたケース

